

百目のあず

僕は今、懐かしい河原を歩いている。

ここは小さい頃よく遊んだ川だけど、

大きくなって来てみると、こんなに小さかったのかと驚いてしまう。

僕はあそこを思い出していた。

先天性の弱視で僕は目があまりよく見えなかった。

本なんて目にくっつけるようにしないと読めない。

すこしはなれただけで人の顔も見えなかった。

だから、川に来てみんなと同じようには遊べない。

でも、冷たい水に足をつけて、

水遊びする友達の楽しそうな声を聞きながら過ごすのが好きだったんだ。

あの頃、体育の時間によくサッカーをやった。

でもぼくはいつも見学。

男の子「おー、ひろ。またずる休みか？」

ヒロ 「ちがうよ。ボールが見えないからさ。」

男の子「えーうそばっかり。」

ヒロ 「ほんとだよ。」

男の子「へーん、うそだうそだ。」

そうやってみんなは行ってしまった。

(何だよ。僕だって、ほんとはサッカーやりたいのに。)

放課後、ゆきちゃんが声をかけてくれた。

ユキ 「ひろくん、みんなでサッカーやるけど、見に来る？」

ヒロ 「え？あ、ぼく用事があるんだ。」

ユキ 「そう、じゃ、また明日ね。」

ヒロ 「うん、ばいばい」

(あーあ、僕だって、みんなと遊びたいな)

帰り道、僕はいつもの川に寄ってみた。

子供たちがいない川は、やけに静かで、風と水の音がするだけだった。

耳を澄ますと、

ヒロ 「あれ？」どこからか変わった音が聞こえてきた。ショキシヨキ、ショキシヨキ

ヒロ 「えーなんだろう。」僕は音のする方へ行ってみた。

大きな岩がいくつかあって、覗くと奥のよどみに誰かがいた。

ヒロ 「あの、こんにちは、君はだれ？」

アズ 「え、おいらのこと、こわくねえんけ。」

ヒロ 「あ、うん、怖くないよ。声を聞いただけで、君がいい子だってわかるよ。」
アズ 「ええ、ほんとけ。ほりゃあうれしいなあ。おいら、百目の小豆とき。妖怪のこどもだ。」
ヒロ 「小豆とき？名前は？」
アズ 「なめえ？なめえってなんだ？」
ヒロ 「みんなは君のことなんて呼んでるの？」
アズ 「はあ、ずうっと呼ばれてねえかな。よくわかんね。」
ヒロ 「そっかー。じゃあ、僕はなんて呼ぼうかな？小豆ときだから・・・あず。
うん、あずって呼んでもいいかなあ？」
アズ 「あずけ。うん、いいなあ。あ、ほうだ。ふんじゃあ、おいらも、おめのこと、ひろって呼んでもいいけ？」
ヒロ 「え？僕のこと知ってるの？」
アズ 「ああ、おいら、いつもここでおめ達が遊ぶ声を聞きながら、小豆をといでんさ。」
ヒロ 「なんだ、遊びに来ればいいのに。」
アズ 「ええ、おいらを見ただけで、みんな怖がって逃げ出しちまうべな。」
ヒロ 「大丈夫だよ。僕がみんなに話してあげるから。」
アズ 「え、だめだめだめ。おいらのこたあ、秘密にしといてほしいんさ。」
ヒロ 「あ、そうか。わかった。ふたりだけの秘密だね。」
アズ 「あ、うん」

僕は次の日もその次の日もあずに会いに行った。

あずはいろんなことを話してくれた。

アズ 「ねえねえ、おいら、人間の大人には見えねえだよ。」
ヒロ 「ええ？すごーい」
アズ 「ほだけど、おいら何にも悪いことしてねえのに、人間を小豆に変えちまうって
言われて怖がられてんさ。」
ヒロ 「ふうん。そうなんだ。」
アズ 「おいら、ずーっとひとりぼっちでさびしかったんさ。
ほんだから、おめと友達んなれて、うれしんさ。」
ヒロ 「僕もだよ。」

僕も学校であったことを話した。

ヒロ 「今日も体育の時ずる休みっていわれたんだ。僕だってほんとはサッカーやりたい
のに。」
アズ 「ほっけ、ほりゃあ、くやしかったべなあ。 あ！ほうだ、おいらの目をやるよ。」
ヒロ 「え、そんなことしたら、あずがこまるだろ。」
アズ 「ううん、百目が99目になったって、平気だべ。」
ヒロ 「ええ、ほんとに。僕、目が見えるようになったら、サッカーボール持ってくるよ。」

河原でサッカーしようよ。きっと楽しいよ。」

アズ 「うん。」

あずは、目を取ろうとしてひっぱった。

アズ 「ほおれ。 あいたたた。」

ヒロ 「だいじょぶ？だいじょぶ？」

アズ 「う、うん。だいじょぶ、だいじょぶ。今取っから、ちーっと待っててな。」

「えい。あ、いたたたた。」

ヒロ 「もういいよいいよ。目なんかもういらぬ。僕は大丈夫だよ。

だって、あずと友達になれたんだもの。」

アズ 「ひろ。」

その晩僕は夢を見た。夢の中で僕はあずとサッカーしてた。

ふたりでいっぱい走って、いっぱい笑って、とっても楽しかった。

あの夏、僕はあずのおかげで、本当に楽しかったんだ。

でも、夏の終わりが来ると、

アズ 「ひろ、おいら、夏しか里に下りてこれねんだ。また来年、きっと会おうな。」

そういつて、あずは、それっきり姿を見せなくなった。

次の年の春、ぼくは遠くの町に引っ越した。

夏になると、あずが僕を待ってるんじゃないかと気が気じゃなかった。

(あずは、どうしてるのかな。あずに会いたいな。)

それから何年かたって僕は今年、高校生になった。

初めての夏休み、僕は電車に乗ってここに来た。

あずに会いに来た。

いっしょにおしゃべりしたあず。僕に目をくれようとしたあず。

あずは、まだここにいるのだろうか？ひとりぼっちでさびしがっているのだろうか？

ヒロ 「あ、ここだ。」

見覚えのある岩を見つけた。

覗くと水がゆらっと動いて、なつかしいあの音が聞こえたような気がした。

ショキシヨキ シヨキシヨキ

ヒロ 「あず。」

声をかけても返事はなかった。

でも、僕にはわかったんだ。あずはここにいる。

影も見えない友達に僕は続けて声をかけた。

ヒロ 「あず、ありがとう。僕たちずーっと友達だよ。」

音がやんで、水がキラキラと光った。